令和６年７月１７日
品川図書館４階
視聴覚ホール

第２回品川区子ども読書活動推進計画策定委員会　次第

１　開　　会

２　委員長挨拶

３　議　　事

（１）計画体系案の検討

（２）有識者ヒアリングについて

（３）ワークショップについて

（４）その他

４　連絡事項

第３回策定委員会開催予定
令和６年８月　日（　）　時～

５　閉　　会

資料一覧

【参考資料】

第1回品川区子ども読書活動推進計画策定委員会　会議録（議事要旨）

【資料】

1-1　基礎調査結果等からみた現状と課題

1-2　次期「品川区子ども読書活動推進計画」の体系案

2　有識者ヒアリングについて

3-1　中学生・高校生・大学生世代対象のワークショップの開催について

3-2　ワークショップチラシ

4　子ども読書活動推進事業例

5　バリアフリー図書の森へようこそ

6　品川区立図書館の障害者サービスについて

令 和 ６ 年 ７ 月 １ ７ 日
第２回　品川区子ども読書活動
推進計画策定委員会　参考資料

第１回品川区子ども読書活動推進計画策定委員会　　会議録（議事要旨）

日時：令和６年６月５日（水）10：00～11：45

場所：品川区役所第二庁舎８階教育委員会室

【出席委員】
　島田委員長、米田副委員長、平嶋委員 古里委員、吉田委員、伊藤委員、巻島委員、
　尾上委員、蜂屋委員、丸山委員
【欠席委員】
　飯作委員、鶴田委員、柳岡委員
【事務局】
　藤村子ども未来部子ども育成課長、中島保育施設運営課長、石橋品川保健センター所長、
　丸谷教育総合支援センター長、唐澤特別支援教育担当課長、河内品川図書館長
【その他】
　品川図書館事業担当　担当者５名、策定支援業務受託事業者　担当者１名

１　開会
２　教育次長挨拶
３　委員紹介
４　委員長・副委員長の選出
　委員会設置要綱に基づき、互選により学識経験者である島田委員が委員長に選任された。
　また、委員長の指名により米田委員が副委員長に選任された。

５　議事
（１）策定スケジュール
　事務局からの説明
　（委員長）　このスケジュールで進めることで良いか。
　　（異議なし）

（２）当該計画の進捗状況、実績について
　事務局からの説明
　（委員長）　ご意見、ご質問はあるか。
　　（特になし）

（３）国、都、特別区の当該計画の状況について
　事務局からの説明

（委員長）　ご意見、ご質問はあるか。
（特になし）

（委員長）　次期計画策定にあたり、どのような視点を大切にしていった方が良いのか、ご意見をいただきたい。

【主な意見】

（委員）　学校図書館で感じることは、一人一台のタブレットが導入されているが、タブレットの調べ学習で終えてしまっている先生がかなりいること。その情報が正しいのかどうかの取捨選択ができないまま扱っている。そのあたりをどうやって教えていくのか。そういうところがテーマだと思っている。また、図鑑や辞典の情報は古くなってしまいがちだが、そこにデジタル図書を入れると新しい情報が増える。そのあたりをどう扱っていくのか。

＠ウーヴ（アットウーヴ）という色々な世代が活動できる場所を運営しているが、通りすがりの人が貸出処理をせずに本を借りることができる事業を、今年度から始めようと思っている。図書館に行き本を借りるというのは敷居が高い面もある。そこで、多世代の人が本の紹介をしながら交流できるような施設にしていきたいと考えている。読書の敷居を下げることが大切なのではないか。

（委員長）　正しい情報、注意しなければいけない情報なのか、見ていく必要がある。情報リテラシーが重要というご意見だった。

（委員）　品川区立図書館７館で、子どもたちの読書の扉を開けるための活動をしている。また、良い本を選び、子どもたちに提供している。

おはなし会については、参加者が劇的に低年齢化している。０歳の乳幼児を抱えて参加するお母さんの参加が増えており、乳幼児向けおはなし会の取組をどこの図書館でも拡大している。そうなると、その上の世代には向かない内容になる。なので、小学校低学年向けのおはなし会は、分けて実施している。そうした取組を通じて、子どもたちが小さい頃から本の扉を開けられるような取組をしている。また、保護者のリテラシーを高めるような活動をしている。

もう１つ、子どもが本に会う機会として、学校がある。アウトリーチで学校に出向き、ブックトークの活動をしている。ブックトークが良い点は、内容をきちんと覚えてスタッフが子どもの前で本について話すので、子どもたちに対する訴えかける力が全く異なる。ブックトークをきちんとできるスタッフを育成することはなかなか大変。学校と連携しながら活動している。問題なのは、学校が忙しいので、なかなか対応していただけないこと。そういう点では、学校との連携の難しさを感じている。

ティーンズ事業を直近５年くらいで開始している。それまでは、大人向けの本と子ども向けの本しかなかったが、ティーンズ専門の書架を各区立図書館に設けた。所蔵数は、3000～5000 冊くらい。最近は、図書館のティーンズボランティアに選書してもらっている。また、POP も作ってもらい本の紹介もしても

らっている。ティーンズ世代が参加しながら、ティーンズ事業を展開している。ティーンズ世代の関心の幅の広さを非常に感じる。ティーンズの本があることを拠り所にしながら、大人の本に出会えるきっかけになると良い。

実現は難しいとは思うが、ティーンズ書架の横に、ティーンズだけが集える場所を作りたいと考えている。ティーンズ世代の居場所がない。その場で他の人と出会うことが、なかなかできていない。そうした活動もできると良い。

こうした活動を通じて、子どもの頃から本に触れてもらい、大人になっても品川区立図書館を愛しているような品川区民を、子どもの頃からつくっていきたいと考えている。

（委員長）　乳幼児向けおはなし会の実施は子育て世代のニーズにもマッチしている。また、ブックトークのスキルは非常に必要だが、そのためにデジタルを活用できるのではないかと思う。品川区では、ティーンズ向けに多彩な取り組みがされており、非常に充実している。その先を見据えて、自習室の開放やティーンズが集まり、活躍できる場も必要だと感じた。

（委員）　自分の子どもたちが、家の中で座って本を読んでいる光景が思い浮かばない。唯一見るのは夏休みの読書感想文があるので、仕方なく本を読んでいる光景くらいしか、家の中では本を読む姿は見受けられない。中学生の頃、朝に読書時間がありライトノベルを読んでいた。３年間で朝本を読む習慣は身に付いたが、高校生になり途絶えた。何かしらのきっかけは、図書館や学校等で作ってもらえると良い。

（委員長）　本以外の色々なものに興味をもつティーンズに対して、どう読書につなげていくのかが、これからの課題になる。まずは集まり、興味あることを話しあう。そこから情報を得るために本で調べるというのも、１つのアイデアだと思う。

（委員）　最近、図書館以外で本に触れる機会が非常に増えている。本を読むために行くのではなく、行った場所に本を読めるスペースがある。例えば、ウーヴやエコルとごし等。エコルとごしには、図書館の本が置かれていて定期的に入れ替わっている。休憩所で本が目に入り、接する機会がある。図書館に行くのはハードルが高い人、例えば、兄弟が多いとか、乳幼児がいるとか、そういう家族でも対応できる、様々な年齢の方が利用できる施設が増えている。ただし、認知度が低い。SNS で調べてもなかなか出てこない。参加したいけど、知らずに終わってしまっている。そこは勿体ないと思う。中学生になるとスマホでイベント情報等を調べるので、もっと SNS やインターネットを活用して、情報を共有できると、もっとたくさんの年齢層が参加できると思う。また、図書館の中高生向けのコーナーはわかりづらい。例えば、中高生が興味あるものでメディア化されたものや、ランキング等で分かりやすく伝えてもらえた方が、手に取ることが多くなると思う。あと、今の子どもたちは、SNS を活用しても、自分たちの情報を公表しない子が多い。何の本を読んでいるのかを見

られたくない。そういう子どもが結構多いと思う。なので、図書館に本カバーがあると良い。それを使えば、読んでいても、恥ずかしいとは思わない。

（委員長）　図書館以外で本を手に取れる環境が非常に重要。図書館が出ていくことも必要だし、色々な地域の取組を一緒にやることも大切。非常に多くの人に知られてない現状は、非常にもどかしい。図書館の方々は非常に熱心に仕事をされているが、情報を発信することが苦手な印象。本のカバーの話は、非常に面白い取組になるかもしれない。

（委員）　中学校に勤務しており、中学校でビブリオバトルを始めてから 10 年以上たっている。コロナまでは、品川区内の中学校の中で、学校図書館の貸出数がトップの方だったが、最近、下になったという報告があった。コロナで本を借りることができなくなった時期が続いたことも影響していると思う。今、中学校にいる子どもたちは、コロナの時に小学校高学年だった。小学校の頃の読書習慣が途絶えているのではないかと思う。コロナにより、子どもたちが本から離れてしまったと思う。ビブリオバトルをずっとやってきているが、貸出数がガクッと落ちたというのは、読書の習慣が途絶えていることが考えられる。図書館スタッフの方は、非常に一生懸命に、子どもたちに来てもらおうと、図書委員会の子どもたちと一緒に色々とやっているが、そこへの反応が落ちている。そのあたりの工夫は、もう少し別のものにしていかないといけないと思う。また、図書館スタッフが代わると、図書館の雰囲気が大きく変わる。そこに子どもたちが反応してしまうこともある。それから、家庭での読書定着は大切。湾岸地域は人口が急激に増えて、忙しい家庭の方が結構多いので、子どもにじっくり向き合って本を読むという時間がない方が多いと思う。親に、読書活動をどうしたら良いのかという情報が伝わっていない。そうなると、家庭での読書活動が定着しないまま、学校に行くことになる。家庭でできないのであれば、学校でということになる。とはいえ、学校で読書活動を定着させるにしても、学校の先生の読書に対する意識もあるし、先生が忙しいので、子どもたちに読書の大切が伝わっていない。頑張っている先生は多いが、子どもたちには、なかなか届いていないのではないか。ここを直せば良いという一元的なものではなく、連動した中での課題は多い。人がいれば良いという訳でもない。デジタルへの対応も必要。ゲームをやっている子どもは、ゲームを好きでやっている子はそれほど多くなく、やることがないからやっている子が多い。そうであれば、読書の楽しさや、読書することで勉強が分かるようになるとかを伝えていくことが必要。探究学習では読書は必須だが、そのあたりは全然追い付いていないと思う。

（委員長）　コロナ禍で失った読書習慣を取り戻すのが大変。そこを踏まえると、デジタル化をどう活用するかを考えていく必要がある。また、家庭、学校、地域が一体となって取り組むことが大切。そうなってくると、読書をする主体である子どもたちだけではなく、保護者へのアプローチも必要になる。

（委員）　区立小学校の図書館担当の先生たちの会に所属している。どの学校でも共通していることは、本を読む子と読まない子との差が大きい。できるだけ多くの子どもたちに、本との出会いを増やしていく必要があると思う。先日の会では、各学校の図書館環境を共有しようということで、チームズを使って各学校図書館の紹介をライブ中継した。各学校で色々な工夫をしていることを共有できた。取組については、各学校の教員が、子どもたちの読書習慣の定着のために、色々と知恵を絞っている。国語の文学的な単元に合わせて、そうしたコーナーを作ったり、同じ作家の本を集めたり。また、今年度から新しい教科書を使うことになったので、その中に出てくる関連図書を一覧にしてまとめている。普段から、教員が自分のクラスで読み聞かせはしているが、これから本校でやろうと思っている取組は、シャッフル読み聞かせ。読み聞かせの時間だけを学校全体で共有して、どの先生が来るのか分からない。意外な先生からの読み聞かせを考えている。デジタル化については、借りたい本が貸し出されていて借りられないというのは、子どもたちは気持ちががっかりする。皆で同じ本を一気に読みたい時にできるようなデジタルの使い方ができると、効果が上がると思う。

（委員長）　シャッフル読み聞かせは先生方にも非常にプレッシャーがかかるが、先生方にとっても非常に勉強になる機会だと思う。同じ本を一気に読むというのは、デジタル化だからこそできること。また、皆それぞれが部分部分を読み、自分が読んだところを要約して話し合うアクティブ・ブック・ダイアローグをすると、自分が読んだのは一部分だが、グループでの話し合いにより、1冊の本を読むことと一緒になる。そういうこともデジタル化でできることと感じている。

（委員）　中学校の教員は、学校図書館部には所属していない。なぜなら、小学校には読書の時間がある。中学校では朝読書をしているが、残念ながら、調査ものに時間に取られて、なかなか読書の時間を確保することが難しい。校長としてやっていることは、随時お薦め本を掲示板で広報したり、校長講話にも入れたり、ホームページの校長室でもアップしている。そういう意味で、子どもたちが触れる機会はある。図書スタッフと一緒にやっているのは、読書ウィーク。ブックトークをしてもらうなど、様々な仕掛けをしている。子どもによって差が大きい。デジタル化については、一人一台のタブレットの使い方が難しい。放っておくと、興味・関心から、全く違った動画を見てしまう。そこのところを、どう本に持っていくのか、なかなか厳しい。調べ学習の際、様々な課題を出しているので、自分たちで調べているが、教員もそうだが、パソコンでコピペの繰り返し。その情報は正しいのか、正しくないのかというところが、なかなかできないまま、やっているのが実情。教員もその方が楽。安易なものを選んでいることが気になる。職場体験では、読み聞かせの場を作ってもらうように働きかけている。中学校では図書の時間を作ることはできない。

（委員長）　中学校の現場では、なかなか時間の確保が難しい。読む人と読まない人との差をどううめていくのか。タブレット１つで本を読むことができるが、他のこともできる。そこに対する働きかけが非常に大切。

（委員）　公立幼稚園には４歳児・５歳児の幼児が在園している。幼児の様子を見ていると本との出会いには差があると感じている。家庭でも、毎日読み聞かせしている家庭もあるが、中には初めて園で絵本に出会うというお子さんもいる。保護者会では絵本の大切さや読み聞かせの大切さを伝えている。幼児期は、文字などへの関心が高まる時期で、自分で文字を読めるようになるお子さんもいるが、絵本については、保護者に読んでもらい心で感じてほしいと願っている。お父さんやお母さんの声で安心して、お話の世界を楽しみ、ワクワクしたり、ドキドキしたりしてほしい。怖い話であっても、安心できる大人に読んでもらい、一緒に聞くことで、これから出会う様々な困難にも立ち向かっていけるのではないかと思う。その子の将来を支えるような本というのは、とても大事なものだと思う。物語の楽しさを小さなときに体感してもらえると嬉しい。本の面白さを知ったお子さんは、小学生や中学生に成長してからも、自分から本を読んでいくと思う。また、幼稚園の教諭には、子どもたちの発達や興味・関心に合っている絵本や紙芝居を選ぶ大切さを伝えている。今は、たくさんの絵本があり、絵がかわいいとか、色合いがきれい等、様々な絵本があるが、絵本の内容に合った絵になっているのか、幼児が心から楽しめる内容になっているのか等を吟味して、絵本を選べるように学んでいきたい。図書館には、園（クラス）に貸出をしてくださるシステムがある。その際には、幼児の発達や季節などに合った本を司書さんが選んでくださる。専門的な見地から、幼児期の教育に必要な図書を選んでもらっていて、大変、感謝している。

（委員）　子ども読書の対象は０～18 歳であり、段階に応じて多様な対応が必要だと感じた。乳幼児でも本との出会いに差があるのは、その親の世代も含めて、家庭での取組によるところかなと思う。また、適切な絵本を選ぶ、それは乳幼児に限った話しではないが、良書と適書は違うということだと思う。

（副委員長）　図書館にお願いしたいのは、良いアイデアは試行していただきたい。地道な活動のＰＲをしっかりしてもらいたい。ボランティア紹介や、図書館と関連した施設の紹介等のＰＲをしていただきたい。身近に図書があるスペースに、ティーンズが集うなど、何らかのつながりができればと思う。最初に必要なことは、本に親しむこと、抵抗感なく本を手に取れること。乳幼児のように最初は自分で本を読むことはできないので、そういう意味での読み聞かせは非常に大事だと思う。そういう意味でいわゆるブックファースト事業はやっているが、さらに充実していくことも大切。うまく家庭に働きかけていくことができればと思う。

（委員長）　コロナ禍を契機に、電子化が大きく進展した。活字の本を読む＝読書から、

電子化を有効に活用していかなければならない状況になっている。障害がある方にとってみれば、電子化によりより活用できる環境はますます増えている。例えば、オーディオブックで聞くことができるが、それは障害のある方だけでなく、誰でも活用できる。そうであれば、耳から聞くことも読書なのか。動画はどうなのか。そういう話も、当然出てくる。読書の目的として、国等では、想像力、思考力、表現力が求められると示されているが、ICT をうまく活用して取り組んでいく必要がある。読書を、苦にせず、楽しむためには、どうしたら良いのかが大切。様々なメディアや娯楽が氾濫している現在、読書を一番にもってくるのは、なかなか難しい。そうなったときに、読書につなげていく体験や取組が大切になる。品川区では、そうした体験の機会が非常に充実している。科学遊び等の体験を通じて、もう少し先を調べてみようとなる。そういう環境をどうつくっていくのかが必要になってくると思う。体験を切り口に読書につなげるというのも、一つのやり方だと思う。

（４）アンケート実施内容について

事務局からの説明

（委員長）　本日いただいた策定委員会でのご意見を踏まえて、調査を実施するということで良いか。

（異議なし）

（５）その他

（特になし）

６　連絡事項

７　閉会

以上

Ⅰ　基礎調査結果等からみた現状と課題①

国や東京都の動向

1　（国）第五次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（令和５年３月）

【基本的方針】

1．不読率の低減
就学前からの読み聞かせ等の促進、入学時等の学校図書館のオリエンテーション等の充実、不読率が高い状態の続く高校生での探求的な学習活動等での図書館等の活用促進、大人を含めた読書計画の策定　等

2．多様な子どもたちの読書機会の確保
障害のある子ども、日本語指導を必要とする子ども等、多様な子どもの可能性を引き出すための読書環境を整備

3．デジタル社会に対応した読書環境の整備
社会のデジタル化、ＧＩＧＡスクール構想等の進展等を踏まえ、言語能力や情報活用能力を育むとともに、緊急時等を含む多様な状況における図書への機能的アクセスを可能とするため、図書館及び学校図書館等のＤＸを進める

4．子どもの視点に立った読書活動の推進
子どもが主体的に読書活動を行えるよう、子どもの意見聴取の機会を確保し、取組に反映させる

2　（国）「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する基本的な計画」（令和２年４月）

【基本的な方針】

1．アクセシブルな電子書籍等の普及及びアクセシブルな書籍の継続的な提供
2．アクセシブルな書籍・電子書籍等の量的拡充・質の向上
3．視覚障害者等の障害の種類・程度に応じた配慮

※読書バリアフリー法第２条第２項において、「アクセシブルな書籍（視覚障害者等が利用しやすい書籍）」とは、「点字図書、拡大図書その他の視 覚障害者等がその内容を容易に認識することができる書籍」と定義されており、 例えば点字図書、拡大図書、音訳図書、触る絵本、ＬＬブック、布の絵本等がある。

3　（国）第６次「学校図書館図書整備等５か年計画」（令和４年３月）

○令和４年度からの５年間で、全ての公立小中学校等において、学校図書館図書標準の達成を目指すとともに、計画的な図書の更新、学校図書館への新聞の複数紙配備及び学校司書の配置拡充を図る。

4　（東京都）「第四次東京都子供読書活動推進計画」（令和３年３月）

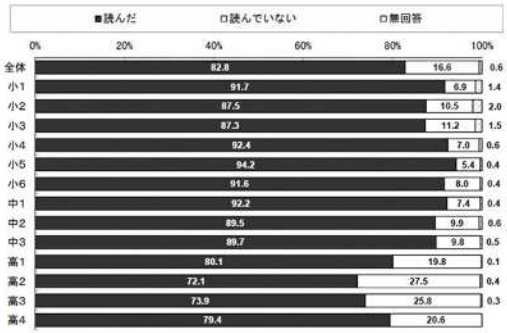
○基本方針では、「学校(園)、図書館、家庭・地域、行政が連携して都内の子供の読書環境を整え、子供の主体的・自発的な読書活動を、その発達段階に応じて推進していく」を示しつつ、計画の目指すものとして、以下の４点を示した。

1．乳幼児期からの読書習慣の形成
2．学習の基盤となる資質・能力の育成のための読書活動の推進
3．特別な配慮を必要とする子供の読書環境整備の推進
4．読書の質の向上

○また、主な取組として、発達段階（乳幼児、小・中学生、高校生等、特別な配慮を必要とする子供）に合わせた取組、読書活動推進の基盤づくりを示した。

０～18歳の子どもの生活習慣や読書活動、電子メディア利用状況

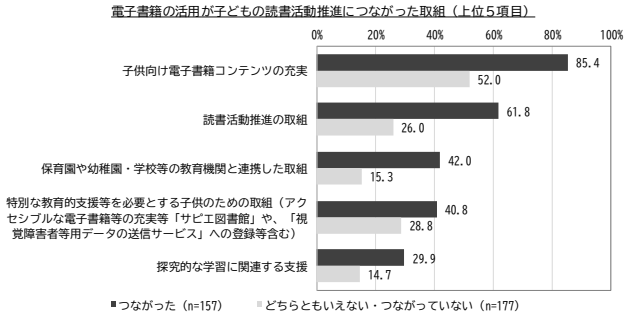
○令和４年度の東京都の調査によると、１か月間に、本、新聞、雑誌、補助教材、学習参考書、図鑑や辞典、その他資料を読んだかについては、「小５」（94.2%）が最も高く、次いで「小４」（92.4%）、「中１」（92.2%）となっている。また、高校生世代の不読率（読んでいない）は、小学生、中学生に比べ高い。



出典：「令和４年度読書状況調査集計結果（東京都）」

○公益社団法人全国学校図書館協議会が毎年実施している学校読書調査の結果をみても、高校生の不読率（１か月間に本をよんでいない児童・生徒の割合）は５割前後を推移しており、高校生世代への読書活動推進に向けた取組み強化が求められる。

○文部科学省の調査によると、電子書籍の活用が子どもの読書活動推進につながった取組としては、「子供向け電子書籍コンテンツの充実」のほか、「読書活動推進の取組」「保育園や幼稚園・学校等の教育機関と連携した取組」「特別な教育的支援等を必要とする子供のための取組」「探究的な学習に関連する支援」が上位に挙げられている。



※電子書籍の活用が子供の読書活動推進に「つながった」と回答した公立図書館と「どちらともいえない」または「つながっていない」と回答した公立図書館との比較。
（出典：令和４年度子供の読書活動の推進等に関する調査研究（電子図書館・電子書籍と子供の読書活動推進に関する実態調査）（令和５年３月）（文部科学省）をもとに作成）

子どもの読書活動に関連する他自治体での主な事例

事業名等	自治体名	事業内容
こどもの本 読み放題 300冊	東京都 立川市	2022年６月から「たちかわ電子図書館」で、こどもの本読み放題300冊が開始。講談社「青い鳥文庫」・KADOKAWA「角川つばさ文庫」など人気の児童書300冊が予約待ちをすることなく読むことができる。
まちなか絵本 スポット事業	神奈川県 大和市	子どもの読書活動を推進するため、市内の子どもが集まるスペースに図書館で作成する絵本セットを貸し出し、気軽に読んでいただく事業。

Ⅰ　基礎調査結果等からみた現状と課題②

第１回計画策定委員会でいただいた主なご意見

○その情報が正しいものかどうか判断する能力がまだない中で、多くの情報にさらされている小学生に、情報の取捨選択の仕方について、どう教えていくかが重要。
○幼い段階から子どもたちが本の扉を開けてくれるような、またそのことをサポートする保護者のリテラシーを高めていくような活動が重要。
○ティーンズだけが集える場所、ティーンズ世代の居場所ができると良い。
○子どもの時代から本に親しみ、大人になっても品川区立図書館を愛していただけるような品川区民を子どもの頃から育んでいけると良い。
○中学生の時に、朝読書等で身についた読書活動・習慣が、高校生になって途絶えてしまうことがあるので、読書のきっかけ、入口となるものを何かしら作っていくと良い。
○図書館以外で本を手に取れる施設が非常に増えており、何気ないところに本があり、気楽に手に取れる環境づくりが重要。
○図書館事業・取組に関する認知度が低いので、ＳＮＳやインターネットを活用して情報を発信することによって、もっと多くの年齢層が参加するようになるのではないか。
○今の子どもたちは、ＳＮＳを活用するが、自分たちの情報はあまり公表しない子が多く、何の本を読んでいるかというのを見られたくないということが結構多い。なのでブックカバーがあると良い。
○家庭での読書定着が重要だが、読書活動をどうしたら良いかが親に伝わっていない。
○読書の楽しさ、読書することにより勉強がわかるようになることを伝えていくことが重要。
○読書を習慣づけるというところを含めて考えると、図書館、家庭、学校やその他地域全体が、一体となって取り組んでいかなければならない。
○本を読む子はすごく読むけれども読まない子もおり、差がある。そこをどう詰めていくか。
○皆で同じ本を一気に読みたいという時に、効果的にデジタルを使うことができると良い。
○幼児期には、耳から聞くというところも大事にする必要がある。
○すべての子どもたちが読書を通して豊かな感性と思いやりの心を育み、実り多き人生を送れるようになることが重要。
○就学前から義務教育期間、そして成人するまで、成長の過程を通して多くの本に接し、親しみ、感性を深め、想像力を高めていくことの積み重ねの重要さが増している。
○様々な娯楽が氾濫している今の世の中、読書を一番に持ってくるのは難しいと考えた時、読書につなげられるような体験や取り組みも重要。

7～8月に実施・とりまとめ

アンケート調査	○5年生・8年生向け調査：公立小中義務教育学校経由、約1600件 ○4年生以下の子どもを持つ保護者向け調査、高校2年生相当の青年向け調査：郵送発送、郵送またはWEB回収、各1500件
学識経験者等へのヒアリング調査	○大学教授、NPO法人、学校司書を対象にしたヒアリング調査 ○中学生・高校生の読書習慣・読書活動の現状、公共図書館が果たすべき役割、サポートを必要とする子どもの読書環境づくり等を聴取
中学生・高校生・大学生世代対象のワークショップ	○品川区立図書館のティーンズボランティア制度に登録している中学生、高校生に参加協力を依頼 ○立正大学・清泉女子大学の図書館サークルメンバーに参加協力を依頼

（基礎調査結果等の現状（1～2頁））

基礎調査結果等の現状からみた課題（現時点で想定されるもの）

○「高校生」世代への読書活動推進に向けた取組み強化が求められる。

○「中学生」「高校生」世代に対する情報発信や、同世代の興味・関心を誘発するきっかけづくり、蔵書の充実により、読書活動の活発化につなげていくことが重要である。

○子どもや保護者に読書の楽しさを実感してもらうための情報発信・啓発活動や、体験等を通じて読書につなげていくための多様な機会を提供していくことが重要である。

○障がいの有無や言語の違い等にかかわらず、誰もが本に親しむことができる読書環境づくりが重要である。

○目にした情報を鵜呑みにせず、情報の正確性を判断するための能力を育むことが重要である。

○従来の紙の本の代替としての電子書籍の利用促進にとどまらず、例えば、同じ本を複数で一気に読む等、紙の本では難しいことでも、デジタル化により容易になることなどにも着目して、デジタル化を進めていくことが重要である。

○就学前から義務教育期間、成人に至るまでの各段階における実態やニーズに応じて、柔軟に対応していくことが重要である。

○子どもの読書活動推進という大きな目標に向かって、品川区立図書館だけにとどまらず、家庭や学校、地域の関連団体等、様々な主体が一体となって取り組んでいくことが重要である。

Ⅱ　次期「品川区子ども読書活動推進計画」の体系案

目的

すべてのこどもたちが

A 読書を通して、豊かな感性と思いやりの心を育み、実り多き人生を送る力を育む

B 本等を活用して、自らの人生をより豊かに生きていく力を育む

策定の視点

- 不読率の低減
- 支援や特別な配慮を必要とする子どもの読書環境の整備
- デジタル社会のメリットを活かした読書環境の整備
- 子どもの主体的な読書活動の推進

目標

子どもの読書活動を幅広く捉え、図書館・学校・家庭・地域等が連携して推し進める

対象・対象別目標

【乳幼児期】

聞く耳を育てると言われる「わらべうた」を聴いて育ち、はじめての絵本と出会い、絵本を読み聞かせてもらって育つことによって、本に親しみを持ち続ける子どもを増やすことを目指します。

【小学生世代】

読み聞かせからひとり読みへスムーズに移行し、様々な本に出合って、読書の世界を広げるとともに、本等を活用して知りたいことを調べる力、情報の取捨選択をする力をつけることを目指します。

【中学生世代】

一人ひとり異なる読書興味に応え得る読書環境を整えるとともに、生徒等が本やインターネットから得た情報を活用し、社会に主体的にかかわろうとする意識・意欲を育み、そのための能力を高めることを目指します。

【高校生世代】

読書の幅を広げるとともに、本やインターネットから得た知識・情報を活用して、主体的に社会へ参画し、情報　リテラシーを身につけることを目指します。

【大学生世代】

区立図書館が核となり、地域の大学生世代をつなぎ、区における子ども読書活動推進の一翼を担ってもらうことを目指します。

本を読むことに困難さがある子ども

【障害がある子ども】

肢体不自由・視覚・聴覚・知的・ディスレクシア等、それぞれの障害特性に合わせて、困難さを取り除くことを目指します。

【外国にルーツがある子ども】

それぞれの母国語や英語による読書ができる環境を整えるとともに、日本語習得の支援に役立つ環境を整えることを目指します。

【生活環境が厳しい子ども】

貧困家庭・ヤングケアラーなど、それぞれが抱える問題を情報を得ること、本を読むことによって解決できる可能性があることを認識してもらうことを目指します。

【保護者】

保護者が、家庭における子どもの読書習慣の定着の大切さをさらに理解するとともに、子どもの読書活動をより積極的に支援するようになることを目指します。
本を読むことに困難さがある子どもの保護者が、その困難さを取り除く手立てがあることを認識し、実際に取り除くために行動することを目指します。

令 和 ６ 年 ７ 月 １ ７ 日
第２回品川区子ども読書活動
推進計画策定委員会　資料２

有識者ヒアリングについて

〇子どもの読書活動や電子メディア利用に関する知見を持つ有識者等を対象にヒアリング調査を実施し、その結果を分析することで、計画策定における施策検討の資料とする。

１　ヒアリング調査　対象者候補

	氏名	肩書	備考
1	佐藤毅彦	立正大学 文学部社会学科教授	元国際子ども図書館館長。図書館情報学の専門家。
2	堀純子	立正大学 文学部社会学科教授	元国際子ども図書館館長。「社会における情報流通」や「孤独と図書館」について研究。
3	安形輝	亜細亜大学 経営学部データ サイエンス学科教授	公共図書館や資料の電子化等の専門家。
4	野口武悟	専修大学 文学部教授	障害のある人に対する図書館サービスのあり方に関する研究の第一人者。文部科学省子供の読書活動の推進に関する有識者会議委員等を歴任。
5	岡枝理佳	NPO 法人 IWC 国際市民の会理事	NPO 法人 IWC 国際市民の会は、品川区立山中小学校において、外国語を母語とする子どもたちに向けた日本語教室を開催。

２　ヒアリング項目（案）

一部、すべてのヒアリング調査対象者に聴取する項目を設けつつ、それぞれの専門家の立場からの意見を把握するために、個別に聴取する異なる項目も設ける。

共通項目

・テクノロジーと読書との関係について
・次期品川区子ども読書活動推進計画を策定していく際に求められる視点・考え方について
・社会全体で子どもの読書活動を進めるために必要なことについて

個別項目

１−３共通
・中学生・高校生の読書習慣・読書活動の現状について
・中学生・高校生の読書活動を促すため公共図書館が果たすべき役割について
・中学生・高校生の読書環境づくりについて
・サポートを必要とする子どもへの図書館サービスについて

４
・障がいのある子どもへの図書館サービスについて
・外国にルーツのある子どもへの図書館サービスについて
・困難を抱えている子どもへの図書館サービスについて
・中学生・高校生の読書活動を促すため公共図書館が果たすべき役割について

５
・ＩＷＣ国際市民の会の活動を通して思うことについて
・外国語を母語とする子どもたちの読書習慣・読書活動の現状について
・外国語を母語とする子どもたちの読書活動を促すために公共図書館が果たすべき役割について
・外国語を母語とする子どもたちの読書環境づくりについて
・困難を抱えている子どもへの図書館サービスについて

令 和 ６ 年 ７ 月 １ ７ 日
第２回品川区子ども読書活動
推進計画策定委員会 資料 3-1

中学生・高校生・大学生世代対象のワークショップの開催について

○ 子どもが参画するプロセスを組み込むことで、子どもの想いを重視した計画とすることを目的として、 中学生世代・高校生世代・大学生世代対象のワークショップを各世代１回、合計３回開催する。

○ 子ども読書活動の当事者である世代の意見や想いを把握し、計画策定における施策の検討 資料とする。

１　中学生・高校生ワークショップ

○調査対象は、品川区立図書館のティーンズボランティア制度に登録している中学生、高校生。

○中学生・高校生のワークショップでは、大学生のティーンズボランティアに依頼して、ファシリテーター（各グループの進行役）として入ってもらう。

○ボランティア登録している中学生、高校生、大学生に対して、WS 参加を促すチラシを同封した参加確認書を郵送し、「協力できる」との回答を得た方に参加してもらう。

○WS の開催日は、８月 25 日（日）

【各ワークショップの開催概要】

中学生世代

テーマ	中学生がもっと本を読むようになるために〇〇ができること
目的	読書をしない中学生にどんな働きかけをすればよいかを考える
時間	１時間
フロー	１．アイスブレイク（５分） ２．目的の共有（５分） ３．ワーク（各 15 分） 　Ａ：中学生が読書をしない理由を考える 　Ｂ：理由に対応した対策を考える 　Ｃ：対策を選ぶ ４．ふり返り（５分）

高校生世代

テーマ	高校生がもっと本を読むようになるために〇〇ができること
目的	読書をしない高校生にどんな働きかけをすればよいかを考える
時間	1時間30分
フロー	1．アイスブレイク（5分） 2．目的の共有（5分） 3．ワーク（各15分） 　A：高校生が読書をしない理由を考える 　B：理由に対応した学校、図書館、家庭での対策を考える 　C：理由に対応したインターネットや情報技術を使った対策を考える 　D：対策を選ぶ 4．ふり返り（5分）

2　大学生ワークショップ

〇大学生を対象としたワークショップでは、立正大学・清泉女子大学の図書館サークルメンバーに参加を依頼。

〇WSの開催日は、8月27日（火）

〇参加人数にもよるが、複数のグループに分けて実施するくらいの規模感の場合、ワールドカフェ方式で、様々な参加者が意見交換しながら、自由な発想でアイデアを出してもらう。

大学生世代

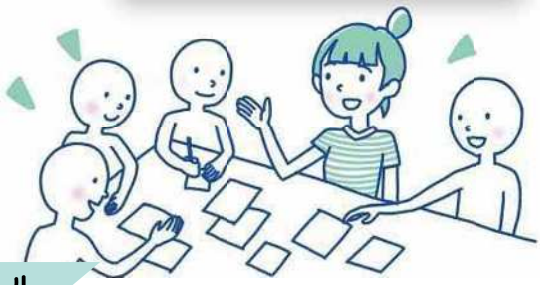
テーマ	中高生が本を読むために地域の図書館で自分たちができること
目的	区内大学と区立図書館の連携事業のアイデア出しをする
時間	1時間30分
フロー	1．アイスブレイク（5分） 2．目的の共有（5分） 3．ワーク（10～25分） 　A：読書の楽しさとそれを感じたきっかけを話し合う 　B：中高生が本を読まない原因 　C：中高生にとっての地域図書館の強み・弱み等を考える 　D：自分たちができることを考える 4．全体共有（15分）

令和6年7月17日
第2回品川区子ども読書活動
推進計画策定委員会　資料3-2

品川区立図書館のティーンズボランティア制度に登録している大学生のみなさま

品川区のこども読書活動に関するワークショップに参加しませんか

8/25（日）
14：00～16：00
品川区立品川図書館
4階 視聴覚ホール



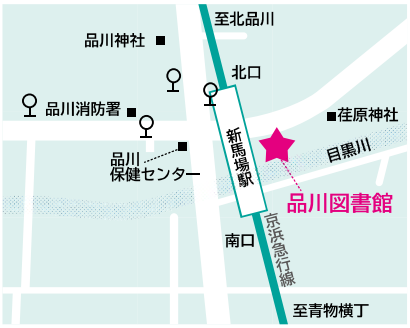
開催概要

品川区では、「品川区子ども読書活動推進計画」を策定し、子どもの読書習慣確立のためにすべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において、自主的な読書活動を行うことができるよう推進しています。

中高生がもっと読書に親しんでもらうために、良いアイデアはないか意見を出し合ってもらうワークショップを開催するにあたり、グループごとの進行役として話し合いを進めてもらうファシリテーターに協力いただける方を募集します！

日時 2024年8月25日（日）
14：00～ 事前説明
14：30～ ワークショップの実施
16：00　終了予定

場所 品川図書館（北品川2丁目32-3）
※京浜急行新馬場駅北口徒歩3分



タイムスケジュール

ワークショップのテーマ
中高生がもっと本を読むようになるために〇〇ができること
（図書館や学校、家庭などでどのような取り組みができるか考えます）

1. アイスブレイク（5分）
2. 目的の共有（5分）
3. ワーク（各15分）
   - A 中高生が読書をしない理由を考える
   - B 理由に対応した学校、図書館、家庭での対策を考える
   - C 理由に対応したインターネットや情報技術を使った対策を考える
   - D 対策を選ぶ
4. ふり返り（5分）

協力いただきたいこと

ファシリテーターとは、話し合いを円滑に進行する役割のことです。今回はティーンズボランティアに登録している中高生たちが意見を言いやすいように促したり、意見の内容をまとめたりなど、全体のワークショップの進行をサポートしてもらいます。

出欠について

ワークショップへの参加にかかわらず、電子申請のQRコードにアクセスし、参加・不参加について
8月2日（金） までにご連絡をお願いします。

参加者には図書カード2,000円分をプレゼントします！

問い合わせ先
品川区立品川図書館　事業担当（第二）
電話　03－3471－4667（代）　　メールアドレス：tshina-jigyo2@city.shinagawa.tokyo.jp

みんなで考えるワークショップの参加者募集！

中高生がもっと本を読むようになるために〇〇〇ができること

8/25（日）
14:30~16:00
品川区立品川図書館 4階 視聴覚ホール

私は〇〇がきっかけで本が好きになったよ

うちの学校ではこんなことしているけど参考になるかな？

どうしたら図書館に行きたくなる？

参加者には図書カード 1,000 円分をプレゼントします！

募集 品川区立図書館のティーンズボランティア制度に登録している中高生の皆様

気軽にご参加下さい！

開催概要

品川区では、「品川区子ども読書活動推進計画」を策定し、子どもたちが読書を好きになるために、どこでも、いつでも、自分から進んで本を読むことができるように推進しています。

中高生にもっと読書を楽しんでもらうために、アイデアを考えるワークショップです。みなさんの参加をお待ちしています！

日時：2024 年８月 25 日（日）
　　14：30 ～ 16：00（10 分前集合）
場所：品川図書館（北品川２丁目 32-３）
※京浜急行新馬場駅北口徒歩３分

ワークショップのテーマ

中高生がもっと本を読むようになるために〇〇ができること

※図書館や学校、家庭などでどのような取り組みができるか考えます。
※ワークショップは中高分かれて実施します。

出欠について

ワークショップへの参加にかかわらず、電子申請のＱＲコードにアクセスし、参加・不参加について **８月２日（金）** までにご連絡をお願いします。

問い合わせ先

品川区立品川図書館　事業担当（第二）
電話：03－3471－4667（代）
メールアドレス：
tshina-jigyo2@city.shinagawa.tokyo.jp

他のティーンズボランティアと交流したい

図書館をもっと楽しい場所にしたい

もっと本の楽しみ方を知りたい

子ども読書活動推進事業例

●「つなぐ図書バトン・つむぐ読書の輪」　福井県立図書館

県内経営者等が高校生におすすめする本などについて発信する企画を実施し、高校生等の若い世代へ、本や読書にまつわる情報を提供。

令和5年度

株式会社 Hacoa 代表取締役 市橋人士氏 インタビュー：金津高校

福井県立図書館講演会「ものづくりの魅力、仕事の魅力～ハコアとわたし～」の関連企画として、講演会終了後に実施し、福井県 HP 等で記事を発信。

令和4年度

福井商工会議所青年部との連携で実施、福井商工会議所青年部HP等で記事発信。

第1回 福井腰痛整体かるらく代表 稲葉大樹氏

第2回 北出経営労務事務所代表取締役 北出慎吾氏 インタビュー：啓新高等学校通信制課程

第3回 株式会社 TSUKIWA 取締役 黒川照太氏　インタビュー：仁愛女子高校

令和3年度

福井銀行との連携で実施し、福井銀行公式 SNS 等で記事を発信。

第1回 株式会社ピリケン代表取締役 中山浩成氏 インタビュー：福井商業高校

第2回 日本銀行福井事務所長 中村健一氏 インタビュー：丸岡高校

第3回 大電産業株式会社代表取締役社長 今村善信氏 インタビュー：三国高校

令和2年度

福井銀行との連携で実施し、福井銀行公式 SNS 等で記事を発信。

第1回 福井銀行 取締役兼代表執行役常務 長谷川英一氏 インタビュー：敦賀高校

第2回 ユニフォームネクスト株式会社代表取締役社長 横井康孝氏 インタビュー：仁愛女子高校

●「子ども読書資料循環制度」　神奈川県相模原市立図書館

図書館スタッフが厳選した絵本や紙芝居等の児童書約4，600冊を新規購入し、これを156セットに分け市内の保育園や児童館などの子ども関連施設に「おすすめ児童書セット」として送付し、このセットを2か月ごとに循環させるもの。施設を利用する子どもたちは、定期的に入れ替わる新しい本を自由に読むことができるため、子どもたちがより多くの本に出会い、気軽に本に触れられるようになる。

各施設に届くコンテナには、30冊程度の児童書と、図書館スタッフが子どもへの思いを込めて作った手作りPOPが入っている。児童書の組合せは約50通り。各施設に年間180冊の児童書が届く。

（循環対象施設）市立の子ども関連施設120箇所（保育園、幼稚園、認定こども園、児童クラブ、こどもセンター、児童館、児童相談所及び陽光園）

子ども読書活動推進事業例

●「まちなか絵本スポット事業」　　神奈川県大和市立図書館

図書館司書が選んだ 30 冊の絵本セットを、書架として利用可能な木箱（幅 36 ㎝、奥行き 37 ㎝、高さ 37 ㎝）とともに市内の子どもが集まる場所に設置。まちのさまざまな場所で気軽に本と触れ合えるようにする取り組み。趣旨及び目的に賛同し協力を希望する、市内に事業や活動の拠点を設置している飲食店、商業施設、医療機関、調剤薬局などの団体（事業者）が対象。

●「ほんくる」　茨城県取手市立図書館

学校図書館を、子どもたちの本との出会いを担保するセーフティネットと位置づけ、毎日通っている学校で、市立図書館の本も借りることができるよう、学校図書館−市立図書館連携システムを整備。各学校へ週 2 回配送便が巡回することにより、市立小中学校に通う児童・生徒ならびに教職員は、市立図書館の本をインターネットなどから簡単に予約し、学校で受け取ることができる。
子どもたちは、学校図書館で 3 冊、市立図書館で 12 冊借りることができる児童・生徒への特別な図書館利用カードを持つことにより、図書館をより身近に感じることができ図書館とのつながりをつくるきっかけとなっている。
小中学校全 20 校に、毎日（月～金曜日）、学校司書が配置されていることにより、実現できた制度。

●「電子図書館利用者ＩＤの全児童生徒への配布と児童書読み放題の提供」　東京都立川市立図書館

GIGA スクール構想で市立小・中学校に在籍する全児童生徒に整備されたタブレット端末のブックマークリストに「たちかわ電子図書館」を登録し、利用者 ID の登録作業を済ませた電子図書館専用の利用カードを配布することで、児童生徒が「たちかわ電子図書館」にアクセスできる環境を令和 3 年 9 月に整えた。
令和 4 年 6 月には同時アクセスや閲覧人数に制限のない「児童書読み放題パック」を購入。講談社「青い鳥文庫」・KADOKAWA「角川つばさ文庫」など人気の児童書が予約待ちをすることなく、何人でも同時に借りることができるので、クラス全員で同じ本を読むことも可能になった。
その後、市内の企業、社会奉仕団体、個人から、読み放題コンテンツが寄贈されていて、現在は児童書の読み放題を 953 点提供している。
（提供コンテンツ）
講談社人気の童話パック/講談社 YA パック/岩崎書店おはなし・学びパック
メイツユニバーサルコンテンツ調べ学習「みんなが知りたい！」パック
講談社『ゼロ歳からのえほん・知育本パック』/Gakken『「動物」図鑑パック』

子ども読書活動推進事業例

●読み放題型電子図書館『Yomokka!』の試行導入　　横浜市教育委員会

横浜市教育委員会は、株式会社ポプラ社と連携協定を締結し、ポプラ社が小・中学校向けの本と学びのプラットフォーム『MottoSokka!（もっとそっか!）』を通じて提供する、読み放題型電子図書館『Yomokka!』を、2024 年 7 月から横浜市の小・中学校9校の学校図書の充実のために試行導入。学級数が 31 以上ある「過大規模校」を主な対象としており、「急増する児童生徒数に対応しようにも、学校図書館のスペースが限られているため物理的に図書を配架しきれない」「読書や調べ学習の授業を行いたいが、学級数が多いため、学校図書館を学級単位で使える割合が少ない」等、子どもたちの読書機会に関する課題の解決を目指す取り組み。
『Yomokka!』に掲載される 38 社、4,300 冊以上（2024 年 7 月現在）の多様なジャンルの電子書籍へのアクセスが可能となる。
協定内容には、ポプラ社が、対象校の教職員へ電子書籍サービスの活用に必要な研修を実施すること、対象校の児童生徒及び教職員から、電子書籍サービスの活用に関する成果や課題をフィードバックし、改善につなげることが含まれている。
※『MottoSokka!』では、「総合百科事典ポプラディア」を中心に、レファレンス資料をデジタル化したオンライン事典サービス 『Sagasokka!（さがそっか!）』も提供。

●りんごの棚の設置　東京都立図書館・渋谷区立図書館・大田区立図書館
豊島区立図書館・足立区立図書館・府中市立図書館
青梅市立図書館・多摩市立図書館　等

特別なニーズのある子どもを対象とした公共図書館サービスの一つとして、スウェーデンの図書館でスタート。はじめは、1993 年にスウェーデンの図書館（ヘルノーサンド図書館）で「りんごの図書館」として開かれ、その後、設置しやすいように「りんごの棚」に変更され、すべての子どもに読書の喜びを体験してもらう場所として、スウェーデン国内のほとんどの図書館に設置されている。
日本初の「りんごの棚」は、2013 年に埼玉県川越市小川町立図書館で設置され、その後、徐々に広がりをみせている。
「りんごの棚」には、紙に印刷された資料だけでなく、特別なニーズのある子どもを対象としたさまざまな利用しやすい形式の資料（アクセシブルな資料）や読書を支援するための道具（リーディングトラッカー等）が置かれる。こういったものを一つの場所に集めることで、子どもが自分に適した資料に出会う手助けをする。また、子ども向けの本ばかりでなく、大人向けに子どもをサポートするためのさまざまな障害に関する資料やサービスの情報も置かれている。

令和6年7月17日
第2回品川区子ども読書活動
推進計画策定委員会　資料5

• Books for EVERYONE •

バリアフリー図書の森へようこそ！

公益財団法人 文字・活字文化推進機構
https://www.mojikatsuji.or.jp/

文字・活字文化推進機構は、「子どもの読書活動推進法」と「文字・活字文化振興法」を具現化する団体です。この機構は、日本語を深く理解し、表現力や思考力、情報分析力や構想力を持った人づくりを目指すことで、言語力豊かな国民生活と創造的な国の実現に向けた活動を展開します。

「バリアフリー図書」って知っていますか？

最近、公共図書館や学校図書館などに、「バリアフリー図書」のコーナーが増えてきました。
バリアフリー図書とは、「読める・読みやすい」、「わかる・わかりやすい」を必要とする読者の特性やニーズを意識して作られた本のことです。

図書館や教室などに、さまざまな種類のバリアフリー図書を蔵書することで、子どもたちが「読める・読みやすい」「わかる・わかりやすい」体験をすることができます！

「読める・読みやすい」
「わかる・わかりやすい」って？

読書の方法として「読みやすさ」「わかりやすさ」に関するポイントがいくつかあります。

- 文章を音声で読み上げてそれを聴く
- 点字をさわって読む
- 布で作られた絵本を見てさわって楽しむ
- 手話で表現された動画を見る
- 文字サイズや書体（フォント）を見やすく調節して読む
- やさしく書かれた文章を読む

「バリアフリー図書」には
どんな種類の本がありますか？

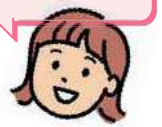
1 点字つきさわる絵本 4ページ
2 布の絵本 6ページ
3 大きな文字の本 8ページ
4 わかりやすい本（LLブック） 10ページ
5 オーディオブック 12ページ
6 手話DVD 13ページ
7 マルチメディアDAISY図書 14ページ
8 読みやすさをつくる道具 16ページ

Books for EVERYONE

1

点字つき さわる絵本

点字がついているね。



絵も透明なインクで盛り上げて印刷されているから、さわってわかるようになっているんだね。

『てんじつき さわる えほん ぐりとぐら』福音館書店

ひらくと…

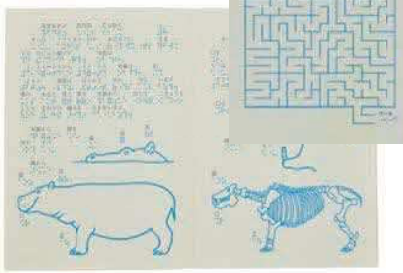
点字というのは、いまから200年ほど前にフランスの盲学校の生徒だったルイ・ブライユが考えた6つの凸点（浮き出した点）の組み合わせで文字を表すしくみです。最初はアルファベットや数字だけでしたが、1890年に、日本でも五十音に対応するしくみが決められました。

もともと点字つきさわる絵本は、ボランティアの人たちによって手づくりで作られてきましたが、2002年に出版社、印刷会社、作家が集まり、「点字つき絵本の出版と普及を考える会」が発足。いまでは、さまざまな点字つきさわる絵本が出版されるようになりました。

点字つき絵本・さわる絵本リスト

手で見る学習絵本「テルミ」

日本児童教育振興財団では、1983年から「テルミ」という学習絵本の出版（２か月に１回発行）を続けています。子どもたちが手でふれる（さわる）ことが比較的むずかしい、雲や星、さまざまな魚や鳥、植物、新幹線や車、ロケットといった乗り物の「かたち」を触察できます。毎号「めいろ」が掲載されていて、みんなで一緒に楽しめます。



Books for EVERYONE 2

布の絵本

これは「むし」という布の絵本です。中を見てみましょう。

下げると…

あっ、ファスナーがついている！

木の中にクワガタがかくれていたよ。

布の絵本は、紙ではなく、フェルト生地などを使って作られています。そして、いろいろなしかけが工夫されているのが特長です。

もともとイギリスやアメリカでクワイエットブック（Quiet Book）、ビジーブック（Busy Book）と呼ばれ、幼児向けの知育玩具として古くから普及していました。日本では、北海道札幌市にある「ふきのとう文庫」が布の絵本の製作をはじめ、やがて全国に製作ボランティアグループが増えていきました。

さまざまなタイプの布の絵本

くっつけたり、はずしたり、ボタンをはめたり、ひもを結んだり、手指を使って楽しむタイプ

昔話、物語などを楽しむタイプ

色、形、数などとふれあうタイプ

ふきのとう文庫の布の絵本については…

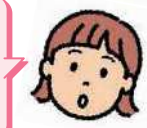
Books for EVERYONE 3

大きな文字の本

『黒魔女さんが通る!!』
石崎 洋司・作　藤田 香・絵　講談社

同じ内容だけど、比べたら、大きな文字の本のほうが「読みやすい」!

文字が大きいだけでなく、書体（フォント）も違っているね。



書体（フォント）には、明朝体やゴシック体など、いろいろな種類があります。
この大きな文字の本は、縦の線と横の線が同じ太さになっているゴシック体を使っています。

明朝体　読 → 拡大 → 読　細くて見えづらい

ゴシック体　読 → 拡大 → 読

もともと大きな文字の本は、ボランティアの人たちがフェルトペンなどを使って一文字ずつ手書きをして作っていました。やがてパソコンを利用して作成するようになり、出版されている本も少しずつ増えてきました。

大きな文字で読めるめじろーブックス

大きな文字の角川つばさ文庫『ぼくらの七日間戦争』（読書工房）

みんながよく知っている物語や伝記、短編小説などを、読みやすく編集しています。

原寸の約16%

「大きな文字で読めるめじろーブックス」については…

大きな文字の小学館ジュニア文庫『ルイ・ブライユ』（読書工房）

大きな文字でわかりやすい小学生で習う漢字1026字

漢字の読み書きが苦手な人でも、漢字の形や読み方・使い方がわかりやすい本です。

原寸の約17%

「大きな文字でわかりやすい小学生で習う漢字1026字」については…

Books for EVERYONE

4

わかりやすい本（LLブック）

『ホテルの仕事　―光さんの1日』埼玉福祉会

写真と文章の下にアイコンみたいなのがついているね。

内容と関係しているみたいだね。

これは「ピクトグラム」といって、文章が理解できない・理解しづらい人が、内容を簡単に理解しやすいようにつけられています。

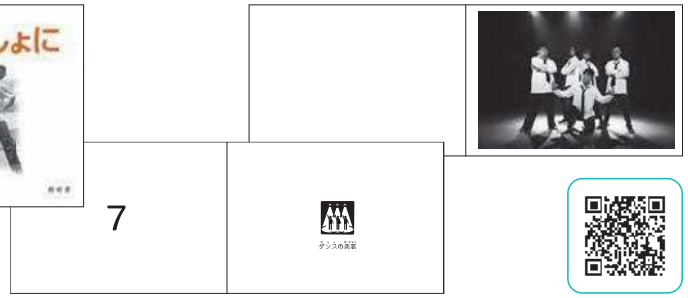
「わかりやすい本（LLブック）」は、もともとスウェーデンで1960年代に、障害のある人や外国ルーツの人なども理解しやすい本として作られるようになりました。

※LLブックのLLとは、スウェーデン語の「Lättläst」（わかりやすい）の略です。

LLブックは、読者のさまざまなニーズにあわせて、おもにつぎの3つのパターンの本が作られています。

文字がほとんどない本

『仲間といっしょに』
樹村房



簡単な文章とピクトグラムを使っている本

『わたしのおべんとう』埼玉福祉会

できるだけわかりやすい文章とたくさんの写真を使っている本

『キラリさんの病気やケガのときはどうするの？』国土社

Books for EVERYONE 5

オーディオブック
音で聴く読書

オーディオブックには、一人のナレーターがアナウンスしているものと、複数の声優さんがドラマ風に作られているものがあります。つぎのQRコードをスマートフォンで読み取って、聞き比べてみよう。

audiobook.jpで
サンプル音声が
聴けます。↓

『バッタを倒しにアフリカへ』
前野ウルド浩太郎・著　光文社
ナレーター：海老沢潮
再生時間：10時間47分46秒

audiobook.jpで
サンプル音声が
聴けます。↓

『かがみの孤城』辻村深月・著　ポプラ社
ナレーター：花守ゆみり、東山奈央、島崎信長、伊藤かな恵、小林裕介、西山宏太朗、大和田仁美、堀江瞬、豊口めぐみ、千本木彩花、田澤茉純、幸村恵理、高木朋弥、亀山雄慈、小田果林、喜多田悠、瀬戸歩、進藤亜由美
再生時間：19時間6分47秒

アナウンスで聴くと、文字で読むより読み方がわかって理解しやすいかな。

私はドラマ風のほうが、物語の世界にすーっと入っていけて、イメージしやすいです。

ヨーロッパやアメリカでは、もともとオーディオブックが普及していましたが、日本では視覚障害者向けの音訳図書以外、普及してきませんでした。
インターネットや定額制サービス（サブスクリプション）の普及によって、最近利用者が増えてきました。

Books for EVERYONE 6

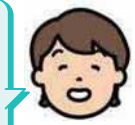
手話DVD

『DVD手話で楽しむ絵本』偕成社

手話で「絵本」を楽しめるDVDもあるんだね。

私は手話を使えないけど、知っている内容なので、楽しめました。

『DVD手話で楽しむ絵本』は、手話の動画を見るだけではなく、音声による読み聞かせや、字幕もついているので、さまざまな立場の人が一緒に楽しめる工夫がされています。



生まれつき、あるいは幼い頃から聴覚に障害があり、手話という言葉を母語にしている人のことを「ろう者」といいます。
「ろう者」にとって、手話を使った読書の可能性はこれからますます広がっていきますが、まだそういった映像メディアは出版されている点数が少ないのが現状です。

DVD手話で楽しむ絵本については…

Books for EVERYONE 7

マルチメディアDAISY図書

わいわい文庫2023 ver.BLUE『海の中をのぞいてみよう 9』林 俊明・文と写真

マルチメディアDAISY図書は、画面に絵や文字を表示しながら、同時に音声も再生できるタイプのデジタル書籍です。

音で読み上げているところが、カラオケのようにハイライト表示されているね。色がついて、どこを読んでいるかわかる!!

デジタル書籍だから、文字サイズや配色を変更することもできるんだ!

DAISYとは、Digital Accessible Infomation SYstem（アクセシブルな情報システム）の略です。
マルチメディアDAISY図書は、さまざまな立場の人がアクセスしやすいように編集されています。

わいわい文庫（公益財団法人伊藤忠記念財団）

わいわい文庫2021 ver.BLUE『かんたん！車いすラグビーガイド』公益財団法人日本パラスポーツ協会

デイジー子どもゆめ文庫（日本障害者リハビリテーション協会）

『ごん狐』新美南吉・作

Books for EVERYONE

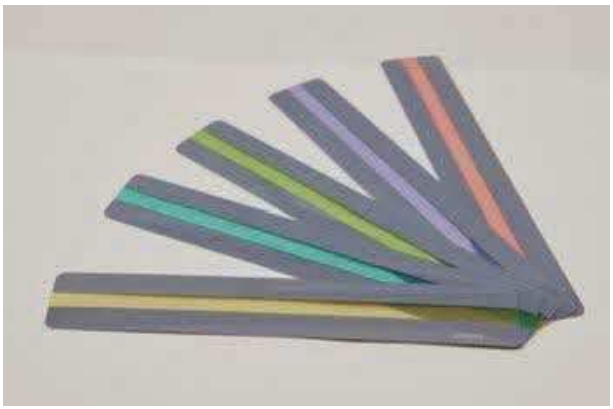
8

読みやすさをつくる道具

※リーディングトラッカーまたはリーディングルーラーといいます。

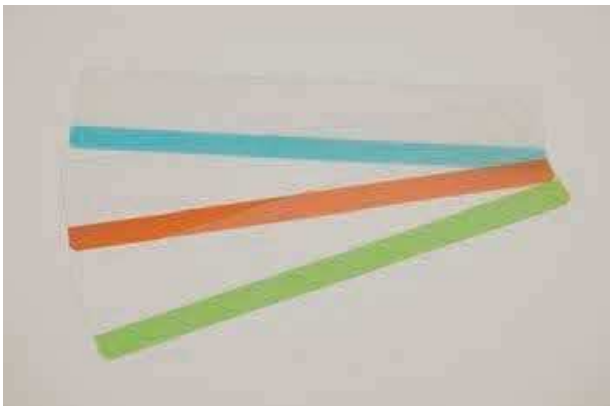
●読む行の両端の行を隠すタイプ

リーディングトラッカー（キハラ）



●読む行のつぎの行にカラーラインを当て、読む行をわかりやすくするタイプ

楽よみ！しおり（できるびより）



自分の目に合った色のカラーフィルターをかぶせると、読みやすくなる人もいるんです。

バリアフリー図書の森へようこそ

公益財団法人 文字・活字文化推進機構
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-2-30
MAIL office@mojikatsuji.or.jp
TEL 03-3511-7305（平日10～17時）

当機構YouTubeチャンネルで「読書バリアフリー」関連動画を多数公開中！
https://bit.ly/49XDkb8

このパンフレットは、一般社団法人授業目的公衆送信補償金等管理協会（SARTRAS）の共通目的基金の助成を受け製作されました。

公益財団法人文字・活字文化推進機構 HP より

この冊子で紹介しているもののほかにも、「読める・読みやすい」「わかる・わかりやすい」色々なバリアフリー図書があります！

・多言語電子絵本

日本の絵本や海外の昔ばなしなどを、様々な外国語に翻訳した電子絵本です。日本で暮らす、外国にルーツを持った方（日本語を母国語としない方） が読みやすい本を少しずつでもそろえていくことが図書館に望まれています。

「多言語絵本の会 RAINBOW」のウェブサイトでは、色々な言語のコンテンツを楽しむことができます。

https://www.rainbow-ehon.com/

・日本語多読本

日本語を母国語としない方や障害などで読むことが難しい方でも楽しく読める本です。レベル別に書かれており、漢字は基本的に総ルビです。これらの本をたくさん読むことで、日本語が知らないうちに身につきます。詳しくは「にほんごたどく」のウェブサイトへ！

https://tadoku.org/japanese/

令和６年７月１７日
第２回品川区子ども読書活動
推進計画策定委員会　資料６

品川区立図書館の障害者サービスについて

□ 障害者サービスの窓口（サービス実施館）

【品川図書館（中央館）】

- 障害者サービスの拠点館
- 「障害者サービス室」（４階）に利用者カウンター設置。開館日は常時開室。
- 各種障害者用資料の利用者への提供（閲覧、貸出、相互貸借・配信データ利用等）
- 対面朗読サービスの実施
- 来館が困難な方で、品川図書館近隣エリアにお住いの方への訪問による自宅配本
- ゆうパックによる来館困難者への自宅配本サービス（配本エリアは区内全域）
- 各種相談（利用相談、レファレンス、資料製作リクエストなど）

【地区館（品川図書館以外の 10 館）】

- 来館困難者への自宅配本サービス（利用者宅訪問による配本）
- 障害者用資料の貸出・返却の取次ぎ
- サービス利用相談

□ 障害者サービスを利用できる人

→　品川区内在住で、「活字を読むことが困難な人」または「来館することが困難な人」

＊ 特別養護老人ホーム、ケアハウスなど、そこに居住しているとみなせる区内の施設入所者を含みます。
（ただし、老人保健施設、ショートステイ等の短期入所者を除く）

「活字を読むことが困難な人」

① 視覚障害のある人
　＊ 身体障害者手帳交付に至らなくても、活字読書が困難な状況にあれば対象

② 視覚に障害はないが、活字による読書が困難な人
　＊ ディスレクシアなど、読み書き困難をともなう障害がある方

③ 身体の麻痺や、寝たきり等の状況にあり、通常の図書を読むことができない人
　＊ 図書を手に持てない、ページをめくれない状態にある方など

「来館することが困難な人」

① 身体障害者手帳の交付を受けている方で、来館利用が困難な人
　＊ 肢体不自由、内部障害等による歩行困難、外出や移動に制限のある方など

② 介護保険の要介護または要支援認定を受けている人で、来館利用が困難な人

③ 上記①②と同様にあると認められる方
　＊ 障害者手帳取得や要介護認定に至らなかった方の場合は、来館困難な状況につき、職員が訪問等により確認します。なお、一時的な疾病等の場合は対象外です。

□ 障害者サービスの利用登録について

- 障害者サービスを利用するには、利用カード交付手続きのほか、障害者サービスの利用登録があわせて必要です。
- サービスの利用相談は、各図書館で受付けています。
- 来館が難しい場合は、図書館職員がご自宅を訪問し、利用登録の手続きをします。

□ 障害者サービスの種類

１．「活字を読むことが困難な利用者」を対象とするサービス

- 障害者用資料の貸出･提供（他館からの取り寄せ、配信データ活用を含む）
  - ・貸出は、２０タイトルまで。６週間以内。
  - ・品川図書館の障害者サービス室では、直接貸出をしています。
  - ・視覚障害者には、郵送貸出が可能です（点字･特定録音物等郵便物扱いで、送料は無料）。
- 対面朗読（図書館資料が対象。品川図書館４階の対面朗読室で実施）
- デイジー図書再生機の貸出

２．「来館することが困難な利用者」を対象とするサービス

- 図書館が所蔵する一般資料の自宅配本
  - ・貸出は、２０タイトルまで。６週間以内。

□ 配信データを活用した資料の提供

「サピエ図書館」

- 全国視覚障害者情報提供施設協会（点字図書館の全国協議会）が運営する電子図書館。全国各地の点字図書館が製作した点字図書やデイジー図書等のデータを配信するサービスを実施。
- 品川図書館の障害者サービス利用登録者で、活字による読書が困難な方は、品川図書館の認証により、「サピエ」の個人会員になることができます。個人会員になると、ご自宅のパソコン等で、「サピエ図書館」から配信されているデイジー図書や点字図書のデータを、直接利用することができます。

「国立国会図書館・視覚障害者等用データの収集および送信サービス」

- 国立国会図書館が開始した、点字図書やデイジー図書の配信サービス。
- 国立国会図書館が製作した資料データのほか、各地の公共図書館（市立･区立等）が製作した資料データを収集して配信しています（品川図書館製作資料を含む）。
- これらのデータは「サピエ図書館」経由でも配信されているので、品川図書館登録利用者で、「サピエ」個人会員の方も、容易に利用することができます。

□ 障害者用資料の製作

品川図書館では、点訳・音訳ボランティアの協力のもとに、点字図書、デイジー図書、さわる絵本を製作しています。

※デイジー図書とマルチメディア･デイジー図書については、購入しているものもあります。

【品川図書館で製作している障害者用資料】

□デイジー図書：年間約４０タイトル

＊ 製作協力は「朗読ボランティアグループ朝笛」「品川朗読ボランティア手火の会」と、個人音訳ボランティア若干名。

□点字図書：年間４～５タイトル

＊ 製作協力は「品川きつつき」。

□さわる絵本：年間２５タイトル（修理を含む）

＊ 製作協力は「むつき会」。

□ 障害者サービス室の所蔵資料

2023（令和 5 年）年 3 月 31 日現在

音訳図書（録音図書）	デイジー図書	1,662 タイトル
	テープ図書	1,545 タイトル
マルチメディア･デイジー図書		213 タイトル
点字図書		329 タイトル
さわる絵本		839 タイトル
拡大写本		55 タイトル

□ 障害者サービス室の設備等

- **来館者への資料貸出／相談カウンター**

＊障害者サービス室設置のパソコン端末にて、サピエ図書館、国立国会図書館からの配信データのダウンロード処理を行っています（職員対応）。

- **対面朗読室**
- **録音室（２室）**

＊デイジー図書録音･編集用ノートパソコン、マイクロホン、その他関連機器を設置しています。

- **点字製作室**

＊点字図書製作･編集用パソコン（配信データ対応可）、点字プリンター等の機器を設置しています。

- 隣接する**第二会議室**に、ボランティア活動用倉庫を設置。

＊品川図書館を活動拠点にしている団体は、第二会議室を例会等で定期的に利用しています。

障害者用資料の基礎知識

障害者用資料とは？

「点訳する」、「音訳する」、「文字を拡大する」、「立体化する」、「内容をわかりやすく翻案する」等々、通常の活字の本を、活字のままでは読むことが困難な人が利用できるように作り直した資料を総称して、「障害者用資料」と呼んでいます（「視覚障害者等用資料」と呼ばれることもあります）。

障害者用資料を「製作」することは、著作権法でいう「複製」にあたります。本来は、著作権者の許諾なしに、図書をそっくり複製することは禁じられていますが、活字による読書が困難な障害をもつ人の必要にあわせて製作する場合に限り、点字図書館や公共図書館の責任の下で、許諾なしに資料を複製（製作）することが、例外として認められています（著作権法第37条）。

品川図書館が所蔵している障害者用資料

デイジー図書（音声デイジー図書）

ＤＡＩＳＹ（デイジー）とは、「Ｄｉｇｉｔａｌ　Ａｃｃｅｓｓｉｂｌｅ　Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ　Ｓｙｓｔｅｍ」（アクセシブルな情報システム）の略で、活字による読書が困難な方々のための、デジタル録音図書の国際規格です。

デイジー図書は、カセットテープではむずかしかった、読みたい章やページの選択が簡単にできるなど、使い勝手が大幅に向上し、今日では、活字による読書が困難な方のための録音資料の主流を占めています。

通常はディスク（ＣＤ）の形で再生し、１枚あたり約20時間の録音が可能です。なお、再生には専用の再生機器、または専用の再生ソフトが必要です。

マルチメディア・デイジー図書

マルチメディア化されたデイジー図書です。再生にはパソコンを用い、画像と音声、テキスト（文章）を、画面上でシンクロ（同期）させて表示することができます。

視覚などに障害がないにもかかわらず、文字の読み書きに困難が生じる「ディスレクシア」と呼ばれる学習障害を持つ人など、活字による読書が困難な方への読書支援メディアとして注目されています。

なお、パソコンでの再生には、再生ソフト「AMIS（アミ）」が必要です。「日本障害者リハビリテーション協会」のホームページから無償でダウンロードすることができます。

テープ図書（カセットテープ図書）

活字の本を音訳者が読み、それを録音して作られる録音図書は、中途失明者など、点字を読むことが難しい人にも対応できる利点があります。

日本で録音図書が作られ始めたのは、民生用のテープレコーダーの販売が始まった1950年代に入ってからで、当初はオープンリールのテープレコーダーで再生するものでした。

その後、1970年頃から使用法の簡便なカセットテープが登場し、視覚障害者のための録音図書の普及が急速に進みました。

点 字 図 書

点字により表記された資料です。

１８２５年にフランスのルイ・ブライユが考案し、１８９０（明治２３）年に石川倉治によって日本語用に翻案された６点式点字が用いられています。

かつては、点訳者が手作業で点字を打ちながら、点字図書を製作していました。現在、ほとんどの点字図書は、パソコンの点訳ソフトを用いて入力した点訳データをもとに、点字プリンターで出力して製作されるようになっています。

さ わ る 絵 本

点字絵本の一種で、絵の部分を立体化し、視覚障害のあるお子さんが手でふれて、おはなしの内容をイメージできるようにつくられた絵本です。おはなしの本文は点字で表記してあるので、点字を習得する学習にも、あわせて活用することができます。

拡 大 写 本

弱視など、「見えにくい」障害がある方々のために、手書きで大きく書きなおした図書です。近年、大活字本※なども出版されるようになりましたが、弱視のある方にとっては字の大きさや配置などが不十分な場合もあります。品川図書館には、児童書を中心に、55 タイトルの拡大写本を所蔵しています。

※「大活字本」は、障害の有無にかかわらず、誰でも利用できる図書として市販されています。品川区立図書館でも「大活字本」は、一般の資料とおなじフロアに配架されています。

図書館協力ボランティア養成講習会について

品川図書館では、障害者用資料の製作にあたる音訳者・点訳者等の後継者を育成するため、次のようなボランティア養成講習会を開催しています。開催時期が決まった時点で、区の広報・図書館ホームページで受講生を募集します。

□点訳者養成講習会（隔年開催）

初級講習会を開催しています（全 10 日間）

□音訳者養成講習会（隔年開催）

「音訳の基礎」と「デイジー図書編集初級」をあわせて学びます（全 13 日間）

□さわる絵本製作体験講習会

「さわる絵本」製作の基本を学びます（全 4 日間）